

2019 年 12 月 26 日

鎌倉市長 松尾 崇 様
鎌倉市教育長 安良岡靖史 様

図書館とともだち・鎌倉
代表 和田安弘
(連絡先省略)

司書有資格正規職員の新規採用について (要望)

日頃より鎌倉市の教育行政にご尽力いただき、ありがとうございます。

当会は過去にも司書資格を持った職員の新規採用を求める要望書を提出していますが(2006、2008、2009年)、残念ながら実施されることなく、その状態が1993年以降、26年間も続いています。

他方、職員定数は徐々に減少し、最大で1993年から1996年にかけて31名(司書27名)いた職員数は現在では23名(司書18名)となっており、技術吏員(専門職)として採用された司書も今では7名になり、年齢的にもほとんどが50代となっています。

職員だけでなく、来年度から会計年度任用職員への制度変更により、44名いる嘱託員も削減せざるを得ず、このままでは館運営に支障をきたすという理由で開館日を減らす予定であると図書館協議会で報告されています。言い換えれば、市の図書館はそれほどまでにぎりぎりの人数での館運営をしいられているということです。

鎌倉市の図書館は同規模自治体の図書館のなかでは資料費は低位にあるものの貸出数、有資格職員数、複写件数などでは上位にあります。司書採用され経験と能力に優れた司書の努力下、予算の少なさをカバーしているものと思われます。しかし、ここ数年、鎌倉市図書館の貸出件数や利用者数、レファレンス件数などのサービス実績は少しずつ下降してきており、司書の頑張りだけでは限界があることを示しています。サービス実績低減の要因は様々に考えられますが、少なくとも人事の面では、職員数の減少とともに司書の新規採用による次世代の育成がなされていないこともその一つだと考えます。

2009年の当会の要望書に対して、退職する司書職員の補充には事務職員を充てている旨の回答をいただいておりますが、それで問題の解決になるとは思えません。

例えば、歴史ある都市鎌倉の図書館には中世に限らず、古代から近代までの鎌倉地域の歴史資料、郷土資料に通暁する司書の存在が欠かせませんが、それを継承する次世代職員の育成には時間がかかります。レファレンス業務、児童奉仕、障害者サービスなど他の分野の仕事も同様です。したがって、職員の専門性と業務の継続性を確保するためには事務職員の補充という当面の措置に終わることなく長期的な視点に立った施策が必要です。

以上により、司書の資格を持ち図書館の仕事に意欲を持つ人材を確保するための専門職採用は必要に応じて継続的になされるべき措置であり、26年間の空白を作ったことにより、いまや喫緊の課題になっていると考えます。早急に有資格者正規職員の新規採用を実施していただくよう強く要望します。

なお、ご回答は文書にて頂けるようお願い申し上げます。